

ふるさと

かつて「ふるさとの山にむかいで」と石川啄木は謳い、「ふるさとは遠きにありて思うもの」と室生犀星は謳いました。しかし今は時代の速さなのか急激に変貌をとげこのようなふるさとにはめつたにお目にからなくなってしましました。二十世紀から二十一世紀はふるさとを変えてしまつた時代だつたのかもしません。もう四十年も前に鶴田浩二さんが歌つた「生まれた土地は荒れ放題、今の世の中右も左も真つ暗闇じやございませんか」が現実となつてしましました。次のような話をテレビで放映しておりました。

【緑なす山あいに過疎の村に今は一人で住んでいる九十歳にもなるお婆さんがおります。山の上にある一軒家にお爺さんはもう数年前に亡くなり三人の子供たちもそれぞれ独立をして一度同じ村に住んでいるお年寄りが二人訪ねてきます。三人のお年寄りはお婆さんが二人、お爺さんが一人です。みんな同じ歳です。三人はこの村の尋常小学校の同級生なのです。もう誰も残つてはいません。年に一度集まつて同級会をするのです。家族の誰よりも長いお付き合いなのです。三人はもちろんそれが異なつた人生を歩んできました。光もあり陰もあり苦労も戦争も悲しい別れも経験しています。村の暮らしもすっかり変わりました。けれども三人のお年寄りにとつてのふるさとはすっかり変わつたふるさとではなく、尋常小学校と共に通い過ぎした時間なのです。風景や境遇は変わつたかもしませんが変わらないのは共に想う時間なのです】

悲しいことかもしれませんのが、ふるさとそのものの場所は今では「そこにある」「いつもある」ものではなく、場所的には「今はもうない」ものなのかもしません。その意味からしますとふるさとは過ぎ去つた時間の中にあるものだと思います。時間は一面は記憶ということと同意義でしよう。風景が変わつても「なつかしさ」の中に暖かさを感じるのはそのようなことでしょう。しかしそのようなふるさとにしてしまつたのは「私」なのです。「私」の心がそうしてしまつたのです。【世の中はおのが心の姿なり】善きも悪しきも外になくして】なのです。ふるさとを変え、世の中を変えそのようなことを嘆き他を非難することは簡単です。しかしそれは私の根っこにある心がえてしまつたのです。ふるさとというのがそこで生まれた土地でもなく、育つた風景でもなくそこに生きた時間にしかないというのがこの百年の時代の流れだつたようです。今はその過ぎ去つた時間の中にしかもうふるさとを持つてはいません。しかしそのようなふるさとを確かめつつ私を支えている時間のふるさとを思うのです。その記憶というものは過ぎ去つたものではなく、過ぎ去らないからこそ記憶なのです。

とどまつているからこそ記憶なのであり、自分を支え続けているからこそ記憶なのです。佛法を聞くということが懐かしさを感じるときがあります。それはふるさとを思う懐かしさに似ています。うそ、いつわり、へつらいのない世界こそが懐かしきふるさとなのだからでしょう。いつも、どこでも変わらない眞実世界の共通項がそこにあります。

時間の大切さをもつと見直していいのかもしませんね。